



パネルディスカッションに臨み、宮司正毅町長（左奥）にさまざまなアイデアを提案する町民ら

## 当別でまちづくりシンポ

# 目指せフロンティア

## 教育や起業…可能性探る

【当別】当別のまちづくりを議論するシンポジウム「フロンティアになれるまち」が11日、町内弥生の田西会館で開かれた。宮司正毅町長をはじめ、町内の北海道医療大の学生や起業家、福祉施設職員らがパネルディスカッションに臨み、教育環境や農業、起業などをテーマに議論した。学生や起業家からは「大型図書館を建設して若者の居場所にしては」「ブルーベリーを町のブランド品に」など、夢のあるアイデアが飛び出した。

（木村直人）

町と自治総合センター（東京）の主催。町民ら約80人が集まった。パネルディスカッションの進行役は、札幌都心の再開発などに携わるコンサルティング会社「ノーザンクロス」（札幌）の山重明社長が務めた。

「アクティブシニア（仕事や趣味に意欲的な高齢者）が多く、北欧と共通点の多い当別は、福祉や教育の先進地になりうる」という指摘もあった。

宮司町長や山重社長は、医療大の学生の多くが町外に住んでいることを指摘し、どうすれば当別に住みやすくなるかを学生にたずねた。学生からは「大きな

一方、起業家らは「当別の気候に栽培が適すときれる」ブルーベリーをブランド化して特産品にすべきだ」「スウェーデンヒルズ周辺は国内随一の景観。観光地化しては」と提案。

これに対し、宮司町長は、財政上の制約を指摘しつつ「定住人口を増やし、多様性のあるまちづくりを目指す。当別のブランド力を高める実効性の高い施策を打ち出したい」と述べた。町は今後も継続して、同

様のシンポジウム開催を検討している。議論を聴いた町内の中村泰三さん(69)は「興味深いテーマが多く、次回は会場からも意見を出せる機会をつくって」と話していた。